

前回CEL七五号を皆さんの手元にお届けしたのは昨年の年末だった。今から思うとついこの間のような気もするが、各地に大雪をもたらした今冬もそろそろ終わり。春はもうすぐそこまで来ている。本当に時間の流れが速い。そういう意味では少し前の話になるが、実はここ数年、密かに大晦日の恒例行事にしていることがある。それは、弊社社員が従事する大阪と京都のコールセンターへ陣中見舞いをし、その足で年の瀬もぎりぎりまで押し詰まった京都の町へ赴くことだ。

大晦日のこの日、コールセンターの現場へ行くのは、私なりのわけがある。ご存知の通り、お客さまからのご要望を受け付けるコールセンターは、大切な「お客さまとの最初の出会いの場」だ。そこでは日々、本当に沢山の（喜怒哀楽の）ドラマが展開する。その中で、お客さまのお役に立とうと、心を尽くす受付者の姿がある。その一瞬懸命な姿を見て、私はこの一年も実に多くの「元気」をもらった。だから、この日も頑張る仲間たちの様子を見て一年を締め括りたいと思うのだ。

そしてその後、新年の到来を待つ京都の町にわが身を同化させる。阪急河原町駅から地上に上がると、毎年ながら八坂神社へ続くアーケード通りは普段より外国からの観光客も多く、前へ進むのもやっとの賑わいだ。祝祭の前の浮き立った空気が喧騒の中で踊っている。すれ違う人々の笑顔からは、行く年への名残と来たる年への希望が交錯して見える。ようやく辿り着いた八坂神社の参道では、初詣の参拝客目当ての屋台店が準備におおわらわ。その空間にわが身を置いて、「去年



慈光院にて

## From Editor

の大晦日は、雪景色の清水寺だったなあ」と思いながら、この一年の時の流れを反芻するのである。年が改まって、新年。今年の正月は田舎から出てきた母を連れて奈良の社寺巡りをした。そのひとつ、大和郡山市の慈光院に行ったときのこと。このお寺は茶道石州流発祥の地で、「境内全体がひとつの茶席」のような造りになっている。その日は案外人影も疎らで、早朝の寒雨にしっかりとした苔の薄緑が印象的であった。正月三日は、近年

## 編集後記

深い精神世界のこととは別として、ひとつ言えるのは、何事にも「何ゆえに」「何故」という問いかけを忘れたならば追究する心や行動を失い、何がそこで止まってしまうということだろう。「こんなもんでいいんだ」と思った瞬間、自らの成長も進歩も全部止まってしまう。限界はすべて自分の心が決めているのだ。——この年の始まりに、私にとって「もうひとつ」の小さな旅の始まりが、そこにあった。

——河瀬 隆

表紙写真 [上] 映画の街・尾道を象徴する「おのみち映画資料館」 [下] 金沢・長町武家屋敷跡で観光客を案内するボランティアガイド「まいどさん」  
裏表紙写真 [上] 大阪のコリアタウンを訪れた修学旅行生 [左下] 金沢のにし茶屋街にて [右中] 京都祇園の小路で [右下] 大阪・新世界の大きなピリケンさん

【お詫びと訂正】 本誌75号の竹内章悟氏の論考において、P.13の図「地球環境問題に対する関心」の平成10年調査の数値に間違いがありました。正しい数字は、「関心がある」42.1、「ある程度関心がある」39.9、「わからない」0.7、「あまり関心がない」13.3、「全く関心がない」4.0です。読者の皆さまに深くお詫び申し上げます。

CEL 76号 特集 ● 都市のオルタナティブ・ツーリズム 発行 平成18年3月25日 頒価1,000円(送料290円)

- 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2
- 発行人 真名子敦司 Atsushi Manago
- 編集人 河瀬 隆 Takasbi Kawase 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集 ● 関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室  
〒541-0051 大阪市中央区備後町3-4-9 輸出繊維会館7F TEL.06-6228-3315

印刷・製本 日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY & LIFE © 2006 OSAKA GAS CO.,LTD

禁無断転載複写

本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は、CEL編集室 Tel.06-6228-3315 Fax.06-6228-3302 cel@kbicom.net まで